

東京アートミーティング(第2回)

[SANAA・MOT 共同企画]

# 建築、アートが作りだす新しい環境 ——これからの“感じ”

2011.10.29 (土)–2012.1.15 (日)

Tokyo Art Meeting (II)

## Architectural Environments for Tomorrow ——New Spatial Practices in Architecture and Art

29 Oct. 2011 (sat) —15 Jan. 2012 (sun)



Walter Niedermayr, Rohbauten 72 | 2008, Courtesy: Galerie Nordenhake Berlin / Stockholm + Galleria Suzy Shammah, Milano; Robert Miller Gallery, New York

## 展覧会概要

21世紀にはいり、情報化や都市化の進行によって、新たな生活形式やパブリックスペースが生まれてきています。本展は、環境や都市の問題、人口の増加やその構成の変化など、私たちを取りまく状況の変化に対して、建築家、アーティストがどのようにこたえ、空間をつくっていくのか、その提案、実践を示すものです。その空間は、人々に新しい体験やアプローチを促し、環境との潜在的な可能性を顕在化させてくれます。アーティストの提案は新しい世界観のメタファーとして建築家の実践的提案と響き合い、きたるべき「人間性」についてのイメージを複数の角度から指し示します。

3.11の震災を含め、自然災害や政治的・社会的不安は、なんらかの形で常に世界各地の現実のなかに存在します。こうした状況に対して、建築は人々にとってどのような存在でありうるのでしょうか。本展においては、日本を含め世界各地における人々や自然、社会の内外において多様な経験・思考から導かれる建築の普遍的な表現と、ローカルの知恵や技術との融合に見いだされる「発見」が展覧されます。

14カ国28組（予定）の建築家、アーティストはそれぞれの空間における実践、試みを、模型、ドローイング、映像、彫刻、写真、ミクストメディアのインスタレーションなどで見せます。眼だけでなく、身体や感覚にうったえる展示空間はその全体が「建築、アートがつくりだす新しい環境」そのものとして、一つのステイトメントとなります。なお、本展覧会は東京都の東京文化発信プロジェクトにおける東京アートミーティングの一環として開催されます。

## 東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。都内各地での文化創造拠点の形成や子供・青少年への創造体験の機会の提供により、多くの人々が新たな文化の創造に主体的に関わる環境を整えるとともに、国際フェスティバルの開催等を通じて、新たな東京文化を創造し、世界に向けて発信していきます。

## 東京アートミーティングとは

現代アートを中心に、デザイン、建築などの異なる表現ジャンル、およびその他の専門領域が会うことで、新しいアートの可能性を提示します。

第1回企画として開催した「トランスフォーメーション」展は、変容・変身をテーマに、文化人類学者とともにイメージ・想像力における人間の可能性を探究することを目的としました。多摩美術大学芸術人類学研究所との提携によって、現代アートの人類学的なイメージや日本・東京から発信されるサブカルチャーまでを含めたアーカイヴ展示が行われ、さらには東京藝術大学と連携した展覧会やフォーラムが開催されました。東京アートミーティングは、このように現代の日本から発信され、世界的共通の関心となりうるテーマを、他領域の専門家とともに企画していくプロジェクトです。そこでは、東京で活動するアーティストやクリエイターの仕事、若手作家を紹介することも主たる目的のひとつとされます。大学、他組織との提携、協働、そして地域をまきこんだ事業展開を内容とします。表現が拡大し、社会との関係を求められている現在、発信、連携、社会へのかかわりを目的とする東京文化発信プロジェクトのひとつとして、東京アートミーティングは大きな意義をもちます。

## 本展の見どころ

建築とアートが提案するPOST2011の環境

ことばでは説明できない、「これからの“感じ”」—未知なる展覧会体験。

### 1 ————— SANAAとMOTがみせる「建築、アートが作り出す新しい環境」

これからの建築概念をリードする建築家の一人であるSANAAと、「アートとライフの関係」をディレクションのひとつとしてきた東京都現代美術館との共同企画。建築とアートが作り出す新しい環境について考えます。展示空間レイアウトもSANAAと共同でデザインし、東京都現代美術館の大きな展示室に、建築とアートのこれからの感じさせる個性豊かな作品が風景のように広がります。

### 2 ————— 従来の建築展とは違った展示の魅力満載

セルガスカーノ、AMID.cero9らの、カラフルでアートのオブジェ彫刻としても魅力にあふれるスタディ・モデル。繊細でほとんど非物質的な素材で制作することで建築に別のスケールを与える石上純也、建築家アランダ・ラッシュやArup AGUなどとの協働制作により、有機的で流動的な空間をつくり出すマシュー・リッチーのインスタレーション、カーペットを環境デザインや建築の一部に転換するペトラ・ブレーゼ、クラフトマンの美学が薫るスタジオ・ムンバイなど、コンセプトや素材の斬新な試みが展示されます。

21世紀において建築と映像の関係はますます重要になっていきます。建築と人々の体験や関係にふれるフィオナ・タンや、ヴィム・ヴェンダースの映像作品、本展のために撮り下ろした原広司のインタビューなど、多様な試みが展示されます。

### 3 ————— マスターたちの新作紹介：日本初公開

現代建築界を代表する建築家フランク・O・ゲーリー。彼の最新作であるニューヨークの《ピークマン・タワー》を、スタディ・モデルを含む約30点の模型と図面で紹介します。日本ではほとんど見ることのできない貴重な建築模型を通して、ゲーリーの独自の建築造形の原点に迫ります。

カンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞したヴィム・ヴェンダースが、SANAAの最新作《ロレックス・ラーニング・センター》を舞台として撮影した3D短編映画《もし建築が話せたら...》を、日本初公開。建築と人々との対話を描くこの作品は、「建物」が図書館の学生や深夜の作業中の掃除夫に話しかける詩情にあふれた場面や、ユニークな建築空間をさまざまな乗り物で疾走する人々の動きを通して、映像による建築空間の新しい表現に挑戦しています。

### 4 ————— 若手の新作、最近作をフィーチャー

これからの建築を担う存在として世界からも注目を集める石上純也、藤本壮介、平田晃久、近藤哲雄などの建築家や、荒神明香といったアーティストなど、東京から世界にむけて若手作家の活動を発信します。

### 5 ————— 大学、コミュニティとの協働

東京藝術大学とのコラボレーションでおこなう「建築、アートが作り出す新しい環境WEEKS」。震災を経て、個々人の意識が、これまで以上に集団としての全体性へと向けられている今、様々なジャンルの建築家、アーティストによるシンポジウムと展覧会を通して、「個」と「全体」の多様な関係性のあり方を探ります。

また近隣のコミュニティを巻き込んだジェラティンによるプロジェクトが予定されています。

## 展覧会によせて SANAA

このたび東京都現代美術館において、チーフキュレーターである長谷川祐子さんの依頼に基づきアートと建築についての展覧会の共同企画に参加することになりました。テーマは「建築、アートがつくりだす新しい環境」です。建築とアートは、これから私達がどのような時代、社会に向かっていくのかを映し出す鏡であり、また同時に、新しい時代を作り出していく重要な手続きでもあると、私達は考えています。その意味でも、新しい感覚や思想、新しい経験といったものに向かう建築的・アートの提案を、各作家に期待しました。新しい時代といっても、これからは多様性の時代がやってくると私達は感じています。いろいろな価値観、いろいろな関係性が同居し混在する世界のモデルを示すことが、建築やアートのひとつの大きな役割と考えます。展覧会全体としても、各々の作品を別々に展示するのではなく、それらを壁で仕切ることなく可能な限り一緒に展示することを目指しました。美術館全体として、ある種の多様性を示すことができればと考えています。

妹島和世+西沢立衛

妹島和世+西沢立衛／SANAA | Kazuyo Sejima+Ryue Nishizawa／SANAA

[妹島和世(1956年茨城県生まれ)、西沢立衛(1966年神奈川県生まれ)により、1995年設立。東京を拠点に活動]

2010年にプリツカー賞を受賞した、現代建築界を代表する建築家ユニット。第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)では日本人初となる国際企画展総合ディレクターを妹島和世が務め、アーティスティック・アドバイザーを西沢立衛と長谷川祐子(当館チーフキュレーター)が務めた。「People Meet in Architecture」というテーマのもと、彼らの考える「建築」を世界中の建築家・アーティストとともに表現した同展は、建築関係者のみなならず世界中の人々に好評を博した。本展には共同キュレーターとして企画から携わり、展示構成も手掛ける。

## 出品作家 ※アルファベット順

AMID.cero 9 | AMID.cero 9

エル・アナツイ | El Anatsui

バーレーン王国文化省 | The Ministry of Culture of The Kingdom of Bahrain

ペトラ・ブレーゼ | Petra Blaisse

ダグ+マイク・スターン | Doug+Mike Starn

藤本壮介 | Sou Fujimoto

アントン・ガルシア＝アブリル | Antón García-Abril

フランク・O・ゲーリー | Frank O. Gehry

ジェラティン | gelitin

原広司+ローランド・ハーゲンバーク | Hiroshi Hara + Roland Hagenberg

平田晃久 | Akihisa Hirata

石上純也 | Junya Ishigami

伊東豊雄 | Toyo Ito

クリスチャン・ケレツ | Christian Kerez

荒神明香 | Haruka Kojin

近藤哲雄 | Tetsuo Kondo

ルイザ・ランブリ | Luisa Lambri

オフィス・ケルステン・ゲールス・ダヴィッド・ファン・セーヴェレン | Office Kersten Geers David Van Severen

ピエト・オウドルフ | Piet Oudolf

スミルハン・ラディック | Smiljan Radic

マシュー・リッチー+アランダ\ラッシュ+ダニエル・ボシア & Arup AGU | Matthew Ritchie with Aranda\Lasch, Daniel Bosia & Arup AGU

妹島和世+西沢立衛/SANAA | Kazuyo Sejima+Ryue Nishizawa/SANAA

マティアス・シューラー+トランスゾーラー | Matthias Schuler+Transsolar

セルガスカーノ | selgascano

スタジオ・ムンバイ | Studio Mumbai

フィオナ・タン | Fiona Tan

ヴィム・ヴェンダース | Wim Wenders

ほか

## おもな作家紹介

### AMID.cero 9 | AMID.cero 9

[クリスティーナ・ディアス・モレノ(1971年-)、エフレン・ガルシア・グリンダ(1966年-)により、1997年設立。マドリードを拠点に活動]  
ピンクやゴールドなどのビビッドな色使いと独特な形状を用い、創造性豊かな素材の探求によって「人々の集まる場」としての空間をつくりだす建築家ユニット。彼らの最新作《ESAパヴィリオン》はパリ建築大学のために計画された仮設建築プロジェクトで、複雑なドーム状のバルーンである。本展では、そのデザイン決定に至るまでに制作された色とりどりのスタディ・モデルとともに、実際に観覧者が中に入ることでできる大きさのモデルを設置し、造形のみならずコンセプトや空間も感じ取れる展示を予定。

### バーレーン王国文化省 | The Ministry of Culture of The Kingdom of Bahrain ★

バーレーン王国は、第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)にて現地から移築した小屋の展示と住民らのインタビュー映像などで構成される《リクレイム》(埋め立てる／取り戻す)を出品し、初参加にして各国館金獅子賞を受賞した。急激に都市開発が進められるバーレーン沿岸部では、埋め立てによって移ろいゆく沿岸線に合わせて地域の住民は自らの手で小屋を建て続けている。固有の海文化が衰退している現状と、古来より生活の場としてきた海との近しい関係を再び取り戻す意味を問いかけるこのプロジェクトは、地球に生きる誰もが抱える人間と自然との関係について示唆を与えるものである。本展では、新たにバーレーンから小屋を移築し、このプロジェクトを紹介する。

### ペトラ・ブレーゼ | Petra Blaisse

[1955年ロンドン生まれ、アムステルダム在住]

ペトラ・ブレーゼは、従来空間の付随物とみなされがちなカーテンやカーペットなどを、空間の中心的な素材のひとつとして扱い、光や風などの自然環境や、カーテンを開閉する人間の動作をとりこんだ動きのある柔らかな建築空間をつくる。本展では、これまで手掛けてきた作品の映像を通してその空間の魅力を紹介するとともに、彼女が主宰するアトリエのアーカイブから、OMA設計の《シアトル公立図書館》のためにデザインした《ガーデン・カーペット》を出品する予定。

### アントン・ガルシア＝アブリル | Antón García-Abril

[1969年マドリード生まれ、同在住]

アントン・ガルシア＝アブリルの建築は、歴史や自然と、その中に生み出される空間とのコンテクストに対する綿密な思索に基づき、大胆な工法でつくられられる。制作の過程は、空間をつくることの楽しさや建築の魅力を伝える重要なプレゼンテーションとして映像にまとめられる。本展では、その土地で入手可能な素材(干草や牛)の力を借りることで、コンクリート建築が自然の一部分となりうるという可能性を提示した《トリュフ》(2006)の映像を模型と合わせて紹介する。

## フランク・O・ゲーリー | Frank O. Gehry

[1929年トロント(カナダ)生まれ、カリフォルニア在住]

ゲーリーの建築は《グッゲンハイム美術館ビルバオ》などをはじめ、うねるような流線型と鋭い直線を採用した他にない斬新で独創的なフォルムを特徴とする。プリツカー賞をはじめ数多くの賞を受賞し、21世紀建築を支える大家として、また芸術家として、多くの賞賛と敬意を集めており、その生涯は近年映画としてもまとめられた。本展では、2011年に竣工した最新作、ニューヨークの高層ビル《ピークマン・タワー》のスタディ・モデルや図面を通して実現した造形のみならず、ゲーリーの独創的な形状が生まれる過程を紹介する予定。

## ジェラティン | gelitin ★

[ヴォルフガング・ガントナー(1970年-)、アリ・ヤンカ(1971年-)、フローリアン・ライター(1967年-)、トビアス・ウルバン(1967年-)により、1993年活動開始。ウィーンを拠点に活動。]

アーティスト集団ジェラティンは、身体そのものやそれを取り囲む環境に対する感覚に直接訴えかけるようなミックス・パフォーマンス、彫刻、空間を操作する作品などを制作する。過激な表現のなかにも、子供の遊びやいたずらを思わせる要素や、自由や楽しみといった感覚をより高めるような要素を盛り込まれ、斬新で奔放、且つ挑戦的で緊張感を孕んだ作品で常に話題を巻き起こしている。本展では、会期中に屋外でのパフォーマンスなどを予定。

## 原広司+ローランド・ハーゲンバーグ | Hiroshi Hara+Roland Hagenberg

[原広司(1936年神奈川県生まれ、東京都在住)、ローランド・ハーゲンバーグ(1959年ウィーン生まれ、東京都在住)]

東京大学名誉教授であり、原広司+アトリエ・ファイ建築研究所を主宰する原広司は、《JR京都駅》(1997)、《札幌ドーム》(2002)などを手掛ける。これらの建築の背景となるのは、70年代より世界40数か国にわたる集落調査の経験を踏まえて展開される「ディスクリート」や「様相」といった独自の建築理論体系であり、それは現代の建築や社会にも多くの示唆を与えている。本展では、現在に至るまで絶えず建築について問い続けている原広司の今と、これからの建築についての撮り下ろしインタビュー映像(マルチメディア・アーティスト、ローランド・ハーゲンバーグ撮影)を上映予定。

## 石上純也 | Junya Ishigami

[1974年神奈川県生まれ、東京都在住]

従来建築とみなされないような、極薄・極細で非物質的かつ無重力的な構造体を通して独特の建築観を展開し、世界的に高い評価を受ける若手建築家。当館「space for your future」展(2007)で大きな注目を浴びた《四角いふうせん》や、第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)で金獅子賞を受賞した《アーキテクチャー・アズ・エア》などをはじめ、建築的思考の蓄積の中から、建築、アート、自然、環境の境界に揺らぎを与え、これまでの建築の概念を揺さぶるような空間や環境を提示している。

## 近藤哲雄 | Tetsuo Kondo

[1975年愛媛県生まれ、東京在住]

環境との関係性や現象学的な事象に感心を寄せる若手建築家。《にわのある家》(2008)で東京建築士会住宅建築賞受賞。《野原のスツール》(2009)で椅子のある風景-北の創作椅子展・最優秀賞受賞。第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)では、過去にSANAAとのコラボレーションも行っているクライメート・エンジニア、マティアス・シューラーと協働して《cloudscapes》を制作。マティアスが人工的に発生させた雲を、円弧を描くスロープで回遊しながら雲を体験できる空間を作りあげた。

## ルイザ・ランブリ | Luisa Lambri

[1969年コモ(イタリア)生まれ、ミラノ在住]

ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエらの近代建築のアイコン的作品や、SANAAやヘルツォーク & ド・ムーロンなどによる同時代の建築作品を被写体としている写真家。外観や全体像ではなく、光や気配といった空間での体験を捉えるランブリの作品には、時間と共に変化する人と建築との関係性が写しだされている。本展では、アメリカを代表するモダニズム建築を多数設計したジョン・ロートナーの《シーツ／ゴールドスタイン邸》を収めた写真作品を出品予定。

## オフィス・ケルステン・ゲールス・ダヴィッド・ファン・セーヴェレン | Office Kersten Geers David Van Severen ★

[ケルステン・ゲールス(1975年-)、ダヴィッド・ファン・セーヴェレン(1978年-)により、2002年設立。ブリュッセルを拠点に活動]

ブリュッセルを拠点とする若手建築家ユニット。彼らは大袈裟な表現手段に頼らず、簡素な造形と端的な空間操作によって、形や空間そのものが持つありのままの魅力を引きだし、その質を変換させる。銀獅子賞を受賞した第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)では、会場の片隅の倉庫に、適切な規模と質の「庇(ひさし)」を取り付けるというささやかな建築的介入によって、人々がにぎわう空間をつくりだした。本展では、美術館屋外スペースにて新作を発表予定。

## スミルハン・ラディック | Smiljan Radic

[1965年サンティアゴ(チリ)生まれ、同在住]

革新的動向を見せるチリ現代建築界において一際注目を集める建築家。近年は彫刻家であるマルセラ・コレアとの協働作品を制作している。第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2010)では、同年2月に起こったチリ大地震を受け、安全で平和な未来を再建する願いを込めた「隠れ家」としての空間を提示する作品《魚に隠れた少年》を発表。本展では、曖昧で頼りない空間や記憶といった要素と建築との関係を通して、一種の私的ストーリーを展開する映像作品を出品予定。

## 妹島和世+西沢立衛／SANAA | Kazuyo Sejima+Ryue Nishizawa／SANAA

※ステートメント参照 >>

## マシュー・リッチー+アランダ\ラッシュ+ダニエル・ボシア& Arup AGU | Matthew Ritchie with Aranda\Lasch, Daniel Bosia & Arup AGU

[マシュー・リッチー(1964年ロンドン生まれ、ニューヨーク在住)、アランダ\ラッシュ(ニューヨークを拠点とする建築家ユニット、2003年設立)、ダニエル・ボシア&Arup AGU(Arup AGUはロンドンを拠点とする先端幾何学ユニット。)]

マシュー・リッチーの関心領域は歴史や神話・哲学から天文学や量子力学にまで及び、建築・音楽・科学などの専門家とも協働して作品を制作している。第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2008)においては、建築事務所アランダ\ラッシュや先端幾何学ユニットArup AGUなどとの協働により、アートや建築、科学の諸領域を横断する立体作品《ザ・イヴニング・ライン》を発表した。本展では、そのシリーズの延長にある《ザ・ドーン・ライン》を、映像作品と合わせて展示予定。



## セルガスカーノ | selgascano ★

[ホセ・セルガス(1965年—)、ルチア・カーノ(1965年—)により、1996年設立。マドリードを拠点に活動]

プラスチックやアクリル樹脂を多用する素材選択と、実験的技法による試作プロセスの中から建ち上がる彼らの建築は、スタディ・モデルの質感そのままに、カラフルで軽快な楽しさにあふれる。同時に、それらは先鋭的でありながら環境との共生が実現するサステナブルな建築でもある。本展では、スペインにある彼らのオフィスの壁一面にところ狭しと並べられたスタディ・モデルの数々を通して、新たな可能性に富む彼らの建築的思考の展開を紹介する予定。

## スタジオ・ムンバイ | Studio Mumbai ★

[ビジョイ・ジェイン(1965年ムンバイ生まれ)により、2005年設立。ムンバイを拠点に活動]

人間と自然と機械との関係から生まれる環境の在り方に関心を寄せるビジョイ・ジェインによって指揮されるスタジオ・ムンバイは、建築家、大工、石工、家具職人など150人近いスタッフで構成される。建築家と、インドならではの職人たちがもつ個性との対話のなかから生まれる建築には、場所に根差した素材や技術が場所の原風景が随所にとり入れられている。本展では、彼らの建築の原点ともいえるスタジオの環境を再現し、その思考を空間としてつくりあげた《ワーク・プレイス》(第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展特別表彰作品)を当館の空間に合わせて再構成する予定。

## フィオナ・タン | Fiona Tan

[1966年プカンバル(インドネシア)生まれ、アムステルダム在住]

中国系インドネシア人とオーストラリア人の両親のもとに生まれ、東洋と西洋に育つという背景から、ポストコロニアル時代の世界における個人的なアイデンティティの探求を重要なテーマの一つとしながら作品を発表する映像作家。本展出品予定の《雲の島》(2010)は、瀬戸内海の島々の風景やそこで行われる作品制作に協力する島民の姿を被写体とし、彼女の典型的手法であるフォーカスやロングショットによって、おぼろげなイメージを映し出す作品である。

## ヴィム・ヴェンダース | Wim Wenders

[1945年デュッセルドルフ(ドイツ)生まれ、ベルリン在住]

ヴィム・ヴェンダースは、写真家としても活動し、世界各地で展覧会を開催している映画監督。《パリ、テキサス》で第37回カンヌ国際映画祭(1984)パルム・ドール受賞、《ベルリン・天使の詩》で第40回カンヌ国際映画祭(1987)監督賞を受賞。本展では、2010年にSANAAが手がけた建築《ロレックス・ラーニング・センター》を舞台に、人と建築との対話を描く3D短編映画《もし建築が話せたら…》を出品予定。

## 来日予定作家

★印のついた作家は展覧会オープニング前後に来日を予定しております。

ご取材を希望の方は東京都現代美術館広報班までお問合せください。

※急遽キャンセルとなる場合もございますので、予めご了承くださいますようお願い申し上げます。



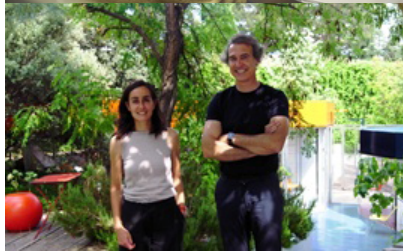
---

バーレーン王国文化省《リクレイム》  
コミッショナー



---

オフィス・ケルステン・ゲールス・  
ダヴィッド・ファン・セーヴェレン



---

セルガスカーノ



---

ビジョイ・ジェイン  
(スタジオ・ムンバイ)

## 展覧会情報

- タイトル**——東京アートミーティング(第2回)  
建築、アートがつくりだす新しい環境——これからの“感じ”
- 会期**——2011年10月29日(土)–2012年1月15日(日)
- 休館日**——月曜日(ただし1/2、1/9は開館)、年末年始(12/29–1/1)、1/4、1/10
- 開館時間**——10:00–18:00 ※10月29日(土)は21:00まで開館(入場は閉館の30分前まで)
- 会場**——東京都現代美術館 企画展示室3F、1F
- 主催**——東京都  
東京都現代美術館・東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)  
産経新聞社  
東京藝術大学
- 助成**——朝日新聞文化財団、福武總一郎、モンドリアン財団、ROLEX、Zumtobel
- 協力**——江尻建築構造設計事務所・長岡造形大学、NECディスプレイソリューションズ株式会社、エルメスジャパン株式会社、オーストリア大使館 / オーストリア文化フォーラム、SCAI THE BATHHOUSE、スペイン大使館、株式会社テツヤ・ジャパン、DIYソールドットコム、日本特殊光学樹脂株式会社、バーレーン王国文化省・駐日バーレーン王国大使館、パナソニック電工株式会社、公益財団法人フランダースセンター、六花亭製菓株式会社、ワコウ・ワークス・オブ・アート、ホワイトストーン美術館、株式会社シーマ
- 後援**——UIA2011 東京大会 日本組織委員会(JOB)
- 共同企画**——長谷川祐子(東京都現代美術館チーフキュレーター)  
妹島和世+西沢立衛/SANAA(建築家)
- アドバイザー**——石上純也(建築家)  
近藤哲雄(建築家)
- 観覧料**——一般1,100円(880円) | 大学生・65歳以上 850円(680円) | 中高生 550円(440円)  
小学生以下無料  
※( )内は20名様以上の団体料金  
※本展チケットで「MOTコレクション」もご覧いただけます  
同時開催「ゼロ年代のベルリンーわたしたちに許された特別な場所の現在(いま)」とのセット券(10/29–1/9の期間のみ販売): 一般1,600円 | 学生・65歳以上1,300円 | 中高生800円
- 同時開催**——「ゼロ年代のベルリンーわたしたちに許された特別な場所の現在(いま)」 9/23–1/9  
「MOTコレクション」 10/29–1/15  
「ブルームバーク・パヴィリオン・プロジェクト」 10/29–2012/10(予定)
- 展覧会オフィシャルブック**——「建築、アートがつくりだす新しい環境」  
SANAA(インタビュー)、原広司、長谷川祐子(テキスト)  
ACCESS刊 | 2011年10月下旬発売予定 | 2,500円(税別・予定) | カラー120ページ(予定)
- 関連プログラム**——トークセッション「建築、アートがつくりだす新しい環境」  
10月29日(土) | 15:30– 東京都現代美術館 B2F講堂  
SANAA、ビジョイ・ジェイン(スタジオ・ムンバイ)、セルガスカーノ、長谷川祐子他(予定)  
先着200名(当日10:00より美術館エントランスにて整理券配布予定) 無料(要展覧会チケット)  
※その他会期中のイベントやプログラムも予定しております。  
詳細は決まり次第ホームページにてお知らせいたします。

# 東京藝大「建築、アートがつくりだす新しい環境」WEEKS

11月10日(木)ー11月29日(火)

会場:東京藝術大学

## 1 | 公開シンポジウム

タイトル: シンポジウム「転換の風景 ～個と全体のあいだ～」

日時: 2011年11月10日(木) 18:00-20:00

会場: 東京藝術大学上野校地 美術学部中央棟第一講義室

[基調講演] 塚本由晴(建築家/東京工業大学)

[パネルディスカッション]

パネリスト: 乾久美子、坂口寛敏、塚本由晴、日比野克彦、保科豊巳、毛利嘉孝

司会: 長谷川祐子

総合司会: 元倉眞琴

## 2 | 東京藝術大学非常勤講師、助教、教育研究助手等による展示

タイトル: 「個と全体のあいだ」展

会期: 2011年11月10日(木)ー11月29日(火) 10:00 – 17:00 ※内覧会: 11月9日(水) 17:00-19:00

会場: 東京藝術大学上野校地 美術学部絵画棟 Art Space1

建築の他、様々なジャンルの12名のアーティストが、「個と全体のあいだ」という問題意識のもと、人間がいかに居場所をさだめるかをテーマに、作品を制作し展示します。各作品は、人間の身体を支え、生活空間の端緒となるようなモノが想定されています。本展では、「建築」における、身体性や生活空間といった要素を重視して、それを対象とすることにより、建築とアートが出会う「アートミーティング」として、「新しい環境」の表現につながることを期待しています。

出品作家(五十音順):

池田嘉人(油画科非常勤講師)、正親里紗(工芸科非常勤講師)、貝山伊文紀(デザイン科教育研究助手)、柏原寛(建築科教育研究助手)、木下哲人(工芸科非常勤講師)、野口一将(建築科非常勤講師)、橋本圭央(建築科教育研究助手)、福井裕司(建築科非常勤講師)、増井岳人(彫刻科助教)、松田健嗣(建築科教育研究助手)、山田菜々子(工芸科教育研究助手)、柚木恵介(デザイン科助教)  
会場構成: 羽藤広輔(建築科助教)

## 3 | 出品作家によるディスカッション

タイトル: 「個と全体のあいだ」展 アーティスト・トーク

日時: 2011年11月29日(火) 15:00-17:30

会場: 東京藝術大学上野校地 美術学部総合工房棟4F 建築科FM教室

Art Space1における展示の出品者によるディスカッション。

各人が作品の画像や関係するその他の画像を持ち寄り、その画像を見ながら議論します。

パネリスト: 上記「個と全体のあいだ」展出品者

司会: 松田健嗣

## 広報用画像

広報用として、下記10点の画像がごさいます。

掲載ご希望の方は別紙FAXシートにてご希望の図版番号をお知らせください。



① AMID. cero9《ESA/パヴィリオン》2010  
© AMID. cero9



② スタジオ・ムンバイ《スタジオ・ムンバイ・ワークショップ》  
Photo © Studio Mumbai [参考画像]



③ スミルハン・ラディック  
《クリプランの炭焼き小屋の増築》1999  
Photo © Smiljan Radic [参考画像]



④ バーレーン王国文化省  
《リクレイム／Hut 17 Karzakan》2010  
Photo © Camille Zakharia [参考画像]



⑤ 荒神明香《空を覆う大きな布があれば》2008  
[参考画像]



⑥ ペトラ・プレーゼ《ガーデン・カーペット》2004  
Photo © InsideOutside [参考画像]



⑦ ヴィム・ヴェンダース《もし建築が話せたら…》2010  
Photo © Donata Wenders; von links: Wim Wenders,  
Ryue Nishizawa, Kazuyo Sejima [参考画像]



⑧ SANAA 《ロレックス・ラーニング・センター》2010  
Photo © SANAA



⑨ マシュー・リッチー + アランダ・ラッシュ +  
ダニエル・ボシア&Arup AGU  
《ザ・ドーン・ライン(サン・ドッグ・ヴァリエント)》2009  
Photo © Jason Mandella  
Courtesy Andrea Rosen Gallery, New York [参考画像]



⑩ フィオナ・タン《雲の島 I 》2010  
Project for the Venice Architecture Biennale 2010, 2 channel HD installation, Filmed on  
location Inujima and Teshima, Japan, courtesy the artist, Wako Works of Art, Tokyo and  
Frith Street Gallery, London, Commissioned by Naoshima Fukutake Art  
Museum Foundation [参考画像]



# 建築、アートがつくりだす新しい環境——これからの“感じ”

東京都現代美術館 事業企画課企画係 広報班宛

**FAX.03-5245-1141**

本展覧会広報用素材として、作品画像10点をご用意しております。

ご希望の際は下記申込用紙に必要事項をご記入の上、ファックス又はEメールにてお申込みください。

なお、写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。

① キャプションは、作家名、作品名、制作年、撮影者等を必ず表記ください。

② 作品のトリミング、文字載せはお控えください。

本展記事を紹介頂く場合には、恐れ入りますが情報確認の為の校正、掲載誌(紙)、DVD、CD等をお送りください。

また読者様・視聴者へのプレゼント用招待券もご手配可能ですので、ご希望の場合はお申し付けください。

○印をおつけください

媒体名:『

』

TV ラジオ 新聞 雑誌 フリーペーパー  
ネット媒体 携帯媒体 その他

御社名:

販売・放送予定日:

ご担当者名:

E メールアドレス:

@

(〒 — )

ご住所:

TEL:

FAX:

図版番号:

ご希望の図版番号に印をおつけください。

- ☐ ① AMID. cero9 《ESA パヴィリオン》2010 ©AMID. cero9
- ☐ ② スタジオ・ムンバイ《スタジオ・ムンバイ・ワークショップ》2011 Photo © Studio Mumbai [ 参考画像 ]
- ☐ ③ スミルハン・ラディック《クリプランの炭焼き小屋の増築》1999 Photo © Smiljan Radic [ 参考画像 ]
- ☐ ④ バーレーン王国文化省《リクレイム／ Hut 17 Karzakan 》2010 Photo © Camille Zakharia, 2010 [ 参考画像 ]
- ☐ ⑤ 荒神明香《空を覆う大きな布があれば》2008 [ 参考画像 ]
- ☐ ⑥ ペトラ・プレーゼ《ガーデン・カーペット》2004 Photo © InsideOutside [ 参考画像 ]
- ☐ ⑦ ヴィム・ヴェンダース《もし建築が話せたら…》2010 Photo © Donata Wenders; from left: Wim Wenders, Ryue Nishizawa, Kazuyo Sejima [ 参考画像 ]
- ☐ ⑧ SANAA《ロレックス・ラーニング・センター》2010 Photo © SANAA
- ☐ ⑨ マシュー・リッチー + アランダ・ラッシュ + ダニエル・ボシア & Arup AGU《ザ・ドーン・ライン (サン・ドッグ・ヴァリアント)》2009 Photo © Jason Mandella Courtesy Andrea Rosen Gallery, New York [ 参考画像 ]
- ☐ ⑩ フィオナ・タン《雲の島 I , Project for the Venice Architecture Biennale 2010》2010, 2 channel HD installation, Commissioned by Naoshima Fukutake Art Museum Foundation, courtesy WWA, Tokyo [ 参考画像 ]

プレゼント用招待券をご希望の場合は印をおつけください。 ☐ 10名様 / ☐ 20名様

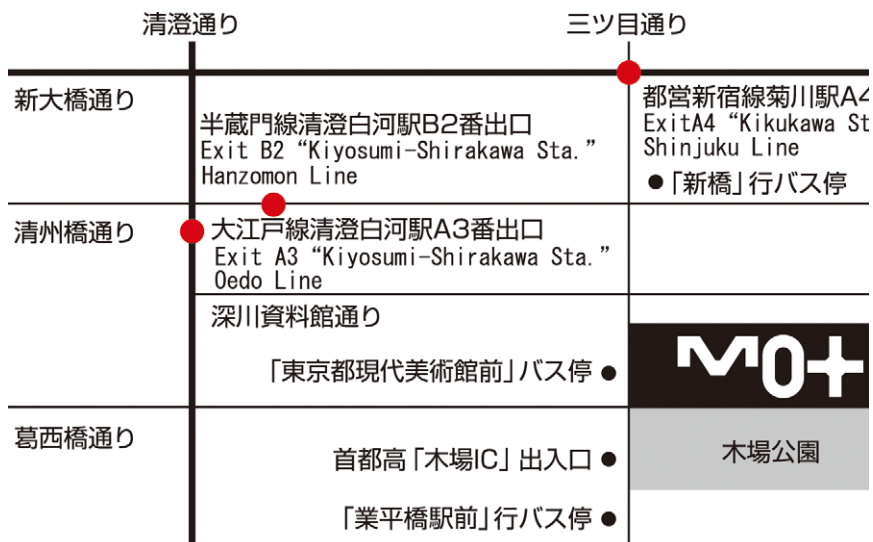
広報お問い合わせ先: 東京都現代美術館 事業企画課企画係 広報班

吉川 m-yoshikawa@mot-art.jp 小原 k-ohara@mot-art.jp

東京都江東区三好 4-1-1 TEL.03-5245-1134 (直通) / FAX.03-5245-1141

## 交通案内

- 東京メトロ半蔵門線・清澄白河駅B2番出口より徒歩9分
- 都営地下鉄大江戸線・清澄白河駅A3番出口より徒歩13分
- 東京メトロ東西線・木場駅3番出口より徒歩15分  
又は都営バス(業10)「業平橋駅前」行き、(東20)「錦糸町駅前」行きで「東京都現代美術館前」下車
- 都営地下鉄新宿線・菊川駅A4番出口より徒歩15分  
又は都営バス(業10)「新橋」行き、(東20)「東京駅丸の内北口」行きで「東京都現代美術館前」下車
- JR東京駅丸の内北口2番乗り場より、都営バス(東20)「錦糸町駅前」行きで「東京都現代美術館前」下車
- 首都高速「木場」又は「枝川」出口利用



本展に関する広報お問合せ：

東京都現代美術館 事業企画課企画係 広報班

吉川 m-yoshikawa@mot-art.jp / 小原 k-ohara@mot-art.jp

Tel. 03-5245-1134 / Fax. 03-5245-1141

〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

東京文化発信プロジェクトに関するお問合せ・取材のお申込み：

東京文化発信プロジェクト室事業推進課

吉原/松井 info@bh-project.jp

Tel. 03-5638-8800 / Fax. 03-5638-8811